



# 教皇様の赦

Libreria Editrice Vaticana,  
Città del Vaticanoの転載許可済  
© 1989  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 〈四旬節〉

# 人間の姿

1 「救いの喜びを返したまえ」  
(詩篇50・12)

教会は今日、四旬節の始まりに、額に灰をかけ、「あなたたちはちりであり、ちりに返ることを心に留めよ」と繰り返し、救いの喜びを請い願います。

典礼を通して教会は常に神の救いの喜びを切望しますが、とりわけ四旬節にその望みを大きくします。

「実に、今は恵みの時、今は救いの日である。」(コリント②⑥・2)

「悔い改めて福音を信じよ。」(マルコ1・15)

キリストが語られた福音の最初のメッセージを受けて教会は、額に灰をかけながらそれを伝えます。

2 「救いの喜びを返したまえ」  
「救いの喜び」は罪からの解放によって生じます。  
「私は自分のとがを認める、私の

3 罪はつねに私の前にある。(詩篇50・3)

罪は汚れます。罪は、何よりも一番大切な霊的生命において人を汚します。

「たえず私の不義を洗い、私の罪を清めたまえ。」(詩篇50・2)

罪は靈魂を害し、良心に重くのしかかる悪です。

「私は自分のとがを認める、私のとがはつねに私の前にある。」

重くのしかかり、靈魂を損なう悪、つまり罪は人と神との間の障害です。

「あなたに向かって私は罪を犯し、御目の前に悪事を行った。」(詩篇50・4)

3 このように詩篇が伝える罪の概念には、実に大きな意味が含まれています。そこでは罪の重大さを決める二者が出会います。善と悪を判断する良心をもつ人間と、神

の神聖と偉大さです。人間は神の御前で生活しています。神は歴史の始めから、善悪に対する正しい判断について人間に尋ねる御方です。「アダム、どこにいるのか。」(創世③・9)そして神こそ、人間が告白によって真実を明かすことのできるただ一人の御方です。

しかし、神は全てを知っておられる裁き手であると共に、人間が呼びかけることのできる御方でもあります。

「私のとがを消したまえ。御身のあふれる慈悲によって私の罪を消したまえ。」(詩篇50・1参照)

「消したまえ。」

「私の魂を助け、良心に重くのしかかるこのとがを拭き取りたまえ。御身だけがおできになります。御身だけが！」

「拭き取ることができるのは御身だけです。創造できるのは御身だけです。御身が私を新たにしてくださなければ、人間である私の内の罪が消えることはありません。

そこで詩篇作者は叫びます。「清い心をつくり、新しい確かな霊を与えたまえ。」(詩篇50・10)

「喜びを返したまえ！」

4 この詩篇の叫びに現代人一人ひとりが耳を傾けなければなりません。簡潔ですが、深く心に染み通る叫びです。それは特別の世界を繰り返し伝えていきます。人間が内に抱く特別の世界、現代人、特に単次元的文化の西欧人が遠くへ押しやってしまった特別の世界を伝えていきます。人間はそれを認識しなくなったのです。

それと共に、人間としての独自性、キリスト信者としての独自性の基本的なことがらまでも失ってしまっている。

「**実に今は恵みの時、四旬節は私たちの前に救いの喜びへと向かう道を開いてくれます。罪の汚れを清めてくださる唯一の方、神に願ひ、罪からの救いと復活の喜びを請い求めましょう。**

した。罪、つまり罪という現実を良心から「消し去る」よう努力しているうちに、実際に手に入れることができるはずの善も失ってしまったのです。人間の独自性、良心による真実認識力——つまり神の御前にいるという事実や、神の「御顔」から発する一条の光をうけているという事実から出る、人間の無比の尊さなども失ってしまったのです。

四旬節は生命の道を開く

5 「救いの喜びを返したまえ」  
現代人は神からいたたく喜びも失くしてしまったことを付け加えなければなりません。

四旬節は私たちの前に、救いの喜びに向かう道を開き、再発見させ、深めてくれます。

この道は詩篇の鼓舞する言葉にあわせて私たちを前進させてくれます。そしてさらにキリストの復活の秘義を通して前進させてくれるのです。パウロはこの点に関して次のように記しています。

「切に願う、神と和睦して留まれ。神は罪を知らなかった御方を私たちのために罪となされた。それは、私たちをその方において神の正義とするためである。」(コリント②⑤・20、21)

6 今日、灰の水曜日にあたり、四旬節がパウロの述べているキリストの秘義を再発見する時となるように祈りましょう。

十字架の上にて死去され、復活されたキリストと共に働く時となりますように。

「四旬節の最後、最大の典礼祭儀、復活の日には詩篇の言葉を実現させます。」

「救いの喜びを返したまえ。」  
キリストの復活の喜び。

# 神の慈しみ



◆「その時から、その弟子は、マリアを自分の家に引き取った。」(ヨハネ19・27)これはファティマにおける今日の祈りの結びの言葉です。弟子の名前はゼベデオの子ヨハネ、十二使徒の一人、福音史家で、十字架上のキリストの言葉、「これがあなたの母です」を耳にした人です。しかし、それより前にキリストは母に「婦人よ、これがあなたの子です」と仰せられました。

◆これは素晴らしい遺産です。キリストはこの世を去るとき、母マリアに一人の人間ヨハネを子としてお与えになったのです。キリストは聖母にヨハネを託されました。そしてこの与える、委ねるといふ結果として、マリアはヨハネの母となりました。神の母は人類の母となりました。その時以来ヨハネは「マリアを自分の家に引き取って」、師キリストの母の、地上での守護者となったのです。子には母親の世話をする権利と義務があります。ヨハネはキリストの遺言によって神の母の子となったのです。そしてヨハネを通して全ての人がマリアの子となったのです。

## 聖母の現存

◆ヨハネの「マリアを自分の家に引き取った」という言葉は、文字通り自分の住居に引き取ったことを意味します。マリアの母性は、私たちと出会う所、聖母の現存を強く感じる所で顕著です。家庭の一隅、聖母像を飾ってある道端の小聖堂から、神の母を称えるために建てられた教会や礼拝堂まであらゆる種類のお住居があります。しかし中でもマリアの現存を鮮明に感じ取れる所があります。その場所は時として随分遠方にまで光を放ち、人々を魅きつけています。その輝きは教区や国、さらに大陸を越えて届くので、このような場所を巡礼地、聖地と呼んでいます。これらの場所で十字架に掛けられた主の独特な遺言が見事に実現し、人々は自分がマリアに委ねられ、託されていると感じ取ることができ、人々は自分がマリア、言わば母親と一緒にいたいがために聖地や巡礼地を訪問し、そこで心を開き全てをお話するのです。ヨハネはマリアを自分の家に引き取った、すなわち、難問も含めてあらゆる問題の中に彼女を引き入れたのです。それは、家族や社会、国家、人間に関わるあらゆる種類の問題です。

## 神の慈しみのおかげで

◆これは、フランスのルルドと同じではないでしょうか。あ

るいは、私の祖国ポーランドのジャスナ・ゴラと同じではないでしょうか。他の聖地と同じくこれらの聖地にも、典礼の言葉がびったりあてはまります。「あなたはエルサレムの光栄、イスラエルの最大の誇り、われらの民の偉大な誉れ！」(ユディット15・9)「あなたが永久に称揚され多くのものに報いられるように、神の恵みあらんことを。われらの民があなどられておるとき、あなたは命を惜しまず、神の前をまっすぐ歩みわれらの滅びを退けた。」(ユディット13・20) ファティマではこれらの言葉が格別の響きで鳴り響きますが、ポルトガルばかりでなくあらゆる国や人にとっても同じことでしょう。

## 霊的な母

◆イエズスが十字架上で死去する時、ヨハネに「これがあなたの母です」と仰せられて以来、ま

た「その弟子がマリアを自分の家に引き取って」以来、マリアの霊的な母親としての秘義は歴史の中で豊かに実現しました。母性は子供の世話をすることです。マリアは全人類の母ですから、聖母のなされる世話は普遍的であると言えます。母親の世話は子供全員に及びます。マリアの母性はキリストを世話することから始まりました。十字架のもとでヨハネをキリストにおいて受け入れ、ヨハネにおいて私たち全員を受け入れてくださったのです。マリアは聖霊において私たち全員を抱きしめてくださいます。なぜなら、使徒信経で宣言するように、聖霊は生命の与え主です。永遠へと開かれて生命の充滿を与えるのは聖霊なのです。それゆえマリアの霊的な母性は、聖霊の力、つまり生命の与え主に与ることです。これこそ、「私は主のはしためです。あなたのお言葉のとおりになりますように！」(ルカ1・38)

## イエズス・キリスト 真の神シリーズ①

# 初代教会の信仰

1 (信仰は神の啓示に対する人間の答えです。) このシリーズで展開しているイエズス・キリストのカテケジスは、使徒信経とニケア・コンスタンチノブル信経に言及します。教会は信経を通して信仰を表明し、宣言しますが、信仰は教会の初めからイエズス・キリストにおける神の啓示の答えとして明確

に示されています。このシリーズでは全篇を通してキリストについての真理を見出す手段として、啓示の言葉に頼ってきました。ナザレトのイエズスは旧約で約束された救い主。救い主、キリスト——真の人(人の子)——は神の御独子、真の神です。キリストについてのこの真理は、十字架の死と復活という過越の出来事

と自らを描写するマリアの謙遜な奉仕なのです。一九一七年五月十三日にファティマで発せられたマリアの特別なメッセージは、同年十月十三日までの五ヶ月間続きましたが、マリアの霊的母性という秘義に照らして、そのメッセージを理解するよう試みたいと思います。

◆教会は、啓示の充滿であるイエズス・キリストによって神の啓示は完成したといつも教えてきました。「主の栄光に輝く現われの時まで、公的啓示を期待することはできないのです。」(『啓示憲章』4)そして私的な啓示については、唯一の公的啓示に一致しているかどうかで判断します。教会がファティマのメッセージを受け入れるのは、それが聖書の呼びかけと真理を含むメッセージであるからなのです。(…)(つづく)(五・十四)

の頂点に至る、御言葉と御業の全体から浮かび上がってきます。

2 (イエズス・キリストのうちには神が御自ら示された) 生き生きとした啓示の全体は、「信仰という応えを受けました。」まず、救い主の御生涯と御教えを直接目撃した人々、つまり命のみことばの現実の姿を「目で見、聞き、手で触れた」人々において、(ヨハネ1・1参照)次いで教会の共同体の内に絶えず続くキリストを信じる人々においてです。イエズス・キリストに対する教会の(信仰)は(最初、どのようにして形造られたのでしょうか。特に

# 説教・講話・書簡等の抄訳

初代教会と最初の数世紀に信仰がどのようにして形造られ表現されたかを考えてみましょう。使徒から伝えられた聖伝が最初に発展したのはこの時代ですから、教会の信仰の形成にとって重要な時期なのです。

### 3 この問題に関する「書き記された証言」の全てが「キリストの御昇天後のもの」であることに注目しなければなりません。それはキリストの十字架上の死と復活という決定的出来事について直接目で見たとことをはっきりと伝えるとともに、御誕生と幼年期から始まるキリストの御生活と働き全てをも伝えていきます。さらにその資料は「使徒たちの信仰」と初代教会共同体の信仰が、キリストの御生涯と使命の「超越前(復活前)」にすでに形造られていて、聖霊降臨の後強力に明らかにされたことをも証言しています。

冒頭に、最初の「教会の信仰」と同じ表現が見つかります。マルコがペトロと深いつながりのあったことはよく知られています。さらに「使徒パウロのいずれの教えにも同じ信仰」を見る事ができます。パウロは改心した後、「諸会堂でイエズスを宣教し始め、イエズスは神の子である」(使徒行録9・20)と述べました。さらに多くの手紙の中で様々な方法で同じ信仰を表現しました。(ガラツィア4・4、ローマ1・3〜4、コロサイ1・15〜18、フィリッピ2・6〜11、ヘブライ1・1〜4) 使徒の頭ペトロとパウロは教会の信仰の源に立っているととてもいいでしょう。

### 「あなたはキリスト」

### 4 特に大切なのがフィリッポのカイザリア地方の近くの出来事です。イエズスが使徒たちに「人は人の子をだれだと言っているか」「あなたたちは私をだれだと思おうか」(マテオ16・13〜15)と尋ねられた間に、ペトロはこう答えました。

「あなたはキリスト、生ける神の子です」(マテオ16・16)と。これはマテオに記された答えですが、他の共観福音書にもキリスト(マルコ8・29)、神のキリスト(ルカ9・20)という表現が見つかります。いずれの表現もヨハネの言葉、「あなたは神の聖なるお方である」(ヨハネ6・69)

と一致しますが、マテオに記されたのがより完全な答えです。すなわちなザレトのイエズスはキリスト、メシア、神の子です。

### 5 「神の子イエズス・キリストの福音のはじめ」(マルコ1・1)

このようにマルコの福音書の冒頭に、最初の「教会の信仰」と同じ表現が見つかります。マルコがペトロと深いつながりのあったことはよく知られています。さらに「使徒パウロのいずれの教えにも同じ信仰」を見る事ができます。パウロは改心した後、「諸会堂でイエズスを宣教し始め、イエズスは神の子である」(使徒行録9・20)と述べました。さらに多くの手紙の中で様々な方法で同じ信仰を表現しました。(ガラツィア4・4、ローマ1・3〜4、コロサイ1・15〜18、フィリッピ2・6〜11、ヘブライ1・1〜4) 使徒の頭ペトロとパウロは教会の信仰の源に立っているととてもいいでしょう。

### 6 四番目の福音書の著者ヨハネは、「有名な言葉」でその福音書を締めくくっています。これらのことを記したのは「イエズスが神の子であることをあなたたちに信じさせるため、そして信じてその名によって生命を得るためである」(ヨハネ20・31)「イエズスが神のみ子であると宣言する者には、神がその中にとどまられ、彼は神にとどまる」と。(ヨハネ①4・15) この信頼すべきヨハネの声は、初代教会においてイエズス・キリストについて信じられていたこと、宣言されていたことを知らせてくれます。

### 7 (ナザレトのイエズスは神の子です。これは超越前(復活前)に主が示された御言葉と御業を基に使徒たちが抱いたキリスト(メシア)への信仰の真理です。復活の後にこの信仰は強められ、書き記された証言を通して表現されました。

異教徒であるローマ人の百夫長が十字架の下でこう告白したことに大きな意味があります。(マルコ15・39)「ほんとうにこの人は神の子だった」(マテオ27・54) この至上の時に恩寵と神の霊感がイスラエル人と異教徒に、すなわち全人類の心の中でまことに神秘的な働きをしたのです。

### 「私の主よ、私の神よ」

### 8 復活後、弟子の一人トマがキリストの神性をはっきりと示す告白をしました。復活を信じようとしなかったトマは、復活されたキリストを目の前に見て叫びました。「私の主よ、私の神よ」(ヨハネ20・28)と。意味深い言葉「私の神よ」だけでなく「私の主よ」とも叫びました。旧約聖書の伝統では「主」(ヘブライオス)は「神」のことでした。聖書にはいたるところで「名づけがたい」神の固有名詞「ヤーウエ」が見つかりますが、これは「私の主」と同じ意味をもつ「アドナイ」で代用されています。従ってトマにとって「私の主よ」は「主」、すなわち神だったのです。

このように多くの使徒の証言を考へ合わせると、聖霊降臨の日にペトロが集まった群衆に向かって語った言葉は大きな意味をもつことが解ります。

「あなたたちが十字架につけたそのイエズスを、神が主としキリストとされた」(使徒行録2・36) 十字架上の死を受けた真の人、ナザレトのイエズスは待望の救い主であるとともに「主」(キリスト)、神だったのです。

### 9 「イエズスは主、……主、主イエズス」これは最初の殉教者ステファノが石殺しにされようという時、口にした告白です。(使徒行録7・59〜60参照) またパウロの手紙にたびたび出てくる告白でもあります。(コリント①12・3、ローマ10・9、コリント①16・22〜23、8・6、10・21、テサロニケ①1・8、4・15、コリント②3・18参照)

「イエズスは主である。聖霊によらなければだれも言うことはできない」と、コリント人への第一の手紙(12・3)の中でパウロは述べています。ペトロは、カイザリアでの信仰告白の後、イエズスがはっきりと言われたことを聞きました。「その啓示は血肉から出たものではなくて天にまします父から出たものである」(マテオ16・17)イエズスはこれより以前に仰せになっていました。「子が何者かを知っているのは父のほかになく……」(マテオ11・27参照) 真理の霊だけがイエズスを証明されるであろうと。(ヨハネ15・26参照)

教会の初めには、キリストへの信仰は「神の御子」「主」(アドナイ)という語で表わされました。それは人の子の神性への信仰です。あらゆる意味でキリストは「救い主」、キリストだけが「救い主」です。言い換えれば救いの実現者、与え主です。

ところで、救いとは神のみが所有なさるもの、神のみが付与する権能をお持ちのもので、救いは罪からの解放であるとともに、新しい命の賜、神の生命に与る賜です。「救いは主以外の者によっては得られない」とペトロの最初の説教の言葉は教えています。(使徒行録4・12)

使徒の時代の多くの著書に同じ信仰を見る事ができます。例えば、使徒行録(5・31、13・23等)パウロの手紙(ローマ10・9〜13、エフエソ5・23、フィリッピ3・20、テイモテオ①1・1、2・3〜4、4・10、②1・10、テイト1・3、2・13、3・6) ペトロの手紙(①1・11、②2・20、3・18) ヨハネの手紙(①4・14) ユダの手紙(25)、幼年期の福音書(マテオ1・21、ルカ2・11参照)などに。

いつも御自身を「人の子」と呼ばれたナザレトのイエズスは、キリスト(メシア)、神の御子、主(キリスト)、救い主であると結論づける事ができます。これが使徒の信仰であり、教会は最初からその上に建てられました。

このうえない愛と崇敬をもって教会はこの信仰を守って来ました。真理の霊の導きの下、使徒に続く新しい世代、キリストに従う人々へと伝えてきました。教会はこの真理をいつの時代においても本質的内容をいささかも損うことなく保護するだけでなく、たゆまず研究し、人々の必要と可能性に応じて詳しく説きつづ教え守って来ました。これが救い主の再臨の時まで教会が遂行するよう求められている仕事なのです。

# 不変の教え

## キリストに

# 目を向けないと 人間が見えない



今日の世界での差し迫った必要は、宣教の第一歩と宣教を続けることです。この仕事を遂行する時、人間の秘義と神の秘義とを関係づける努力を傾ける教会は、目的及び目的を遂げるための手段についてはっきりとした考えを持っていないければなりません。これらの中に大変役立つのが、第二バイカン公會議の指導原理と簡潔に公式化した述べられた直観です。公會議が非常に力強く表現した真理の一つが、「受肉したみ言葉の秘義においてでなければ、人間の秘義はほんとうに明らかにはならない」(『現代世界憲章』22)なのです。人間性を、その尊厳と運命を含めて十分に理解するためには、世界がキリストを理解しなければなりません。キリストは人間に神を啓示するだけでなく、人間自身をも啓示する必要があります。(人間の秘義は受肉したみことばにおいて理解できるようになるのです)。キリストの秘義における人間の秘義を明らかにするための教会の全活動で、この原理は教会の指導原理となります。



以上は要理教育においてとりわけ大切になります。教会が一人ひとりにキリストを通して、キリストの内に、キリストと共に自己理解を深めるように導く努力にとつ

重要な点なのです。人間は神に達するために己れを知らねばならず、己れを知るためにはキリストに目を向けねばなりません。人間は神の似姿に創られています。神の姿は全て「目に見えぬ神の姿(コロサイ1:15)」とパウロが呼んでいるキリストの中に常に見出されるのです。被造物として人間は、人々との交わりの内に生きるべく招かれた(社会的存在)でもあります。共同体の、そして人格と人格の関係の最高の形は、至聖なる三位一体の交わりの中でキリストが生きておられる形です。

人間は自己を、体と靈魂とが親密に一致した存在として理解します。キリストの場合、人間性と神性との一つの神的ペルソナにおいて位格的に結ばれています。人間の運命の素晴らしさは、キリストの人性を通してキリストの神性に与る(ペトロ2:1・4参照)ことにあります。人間は自分の体を神を賛美し、その尊厳にふさわしい方法で自らの体を取り扱うように召されているのです。イエズス御自身には、神聖の満ちみちたものが体の姿を取って宿っています。コロサイ2:9参照)人間は知性のおかげで物質界全体に勝り、神の真理に触れることができます。受肉したみことばとしてイエズスが



「私は道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14・6)と仰せられたのは御自身がまさにこの真理そのものであることを宣言なさったのです。聖霊の働きにより、人間は創造と贖い双方についての(神の計画)を知ることが出来ます。イエズス御自身は神の計画です。「万物はみことばによって造られた。一つとしてみことばによらずに造られたものはない」(ヨハネ1・3)のです。その上、神はキリストを私たちの「知恵と正義と聖性とあがない」(コリント①・30)になさったことも、私たちにはわかっていません。

自己を知るにつれ、人間は(良心)の奥底にある法を見出します。この法は人間が自らに課したものでなく従わなければならないものです。(『現代世界憲章』16参照)イエズスは全ての法の充満と真髄を啓示なさいました。それは神への愛と隣人への愛に要約されます。(マテオ22・37(40参照)イエズスが命じられた方法で愛する以外には、人間の心を十分に満足させることはできません。

「自由」は人間が神の似姿であることの特別なしるしです。人間の自由を最高の形で具現する人間、すなわちイエズスは、その自由を使って御自分の生と死を御父に奉獻し、ことごとく神の御旨に従って生きられました。「常にみ旨にかなうことを行う」(ヨハネ8・29)と仰せになったように、御自分の自由は御父のためにあることを宣言なさいます。同時にイエズスは人間の内にある自由の逆らうものを破壊します。イエズスの使命は人間の良心を奴隷にして

いるものを追い出すことでした。人間にとつての最後の難題は「死」です。キリストに目を向ければ、人間は生きるべく定められていることを教わります。キリストの御聖体は生命の保証です。キリストの肉を食ベキリストの血を飲む者は、すでに永遠の生命を有しているのです。(ヨハネ6・54参照)キリストはその復活によって死を征服し、全ての者の復活を示されました。キリストは生命を宣言し、人間にその最終的運命における人間を、つまり生命を啓示なさったのです。

### 不可知論と無神論

今日の教会では、(全要理教育)の中心として受肉したみことばのペルソナを、呈示することが最も重要です。数年前、公會議の「教会における司教の司牧任務に関する教令」にそって、『要理教育一般指針』が聖職者聖省から出されました。その目的は、神の民全員にキリスト中心の要理教育を振興することでした。

これを行うに当り同書は、「要理教育はイエズスをその具体的な実在と、また彼のメッセージと共に、宣言しなければならぬ。すなわち、人間が人間の素晴らしい完成に向かう道を開かねばならない」(53)と述べています。

八年後、私は『要理教育に関する使徒的勧告』を出してこのキリスト中心の方法を取るよう努力しました。「要理教育の概念の中には、(…)ナザレのイエズス・キリスト自身が含まれていることをまず認めなければならぬ」(六月八日)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 ■定価 一部七十円送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要